３．証言．母が死んで私が生き残った（安達福太郎さん）

1945 年 5 月 8 日、母安達むつ 25 歳が私を背負って、出征兵士を国鉄浜野駅まで見送った時、艦載機が現れ、機銃が母の背中から腹部へ打ちぬいて、母は即死したらしい。背中の私は体が小さいので、機銃は私の右わきを通過したが、右足親指に傷を受けた。今も指が変形している。しかし、母が死んで私が生き残るとは悲しい運命である。私はこうして戦争孤児となった。父はすでに中国で戦死していた。

（注）千葉市空襲と戦争を語る会の情報では、安達むつさんが 5 月 8 日の千葉市空襲の唯一の犠牲者である。

資料出所：2017 年 8 月 19-20 日千葉県教育会館で開催された第 47 回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議千葉大会における「鋸南町市部瀬の惨劇」で「鋸南町の明日を考える会」澤久子さんが報告された原稿から引用した。安達さんについては「千葉市大空襲とアジア太平洋戦争の記録 100 人証言」出版後の証言による。